

## 同じ空気を吸い、同じ語らいの場所で (挨拶)

国本 衛 (ハンセン病市民学会東京集会実行委員長)

私は、ハンセン病市民学会の共同代表の一人ではありますが、また、ハンセン病国賠訴訟を闘ってきた原告の一人でもあります。

原告として、命を削りながらの闘いをしてまいりました。闘いは、多くの療友から見送られて法廷に立った、というものではありません。圧倒的多数の療友から誹謗中傷されながらの闘いでした。

それでは、なぜにそのような現象が起きたのか、なぜ裁判は間違いだと非難されたのか。私は、療友たちの非難や妨害があったことを、責めるつもりはありません。それは、言うまでもなく、90年の間、国家権力によって人間の精神構造を変えられてしまった、そこに問題の根源があるからです。

療養所とはいえない収容所に収容されると、相互扶助の精神を強要され、忠君愛国の精神と共に、一大家族主義への形成に力を注がねばなりません。そこで私たちは、判断能力を奪われたのです。その故に、らい予防法廃止を遅らせてしまいました。そのことをまず問わなければならないと考えるものです。

そして、裁判に勝利し国が謝罪したからといって、問題は解決したわけではありません。私たちは未だに原状回復に至っておりません。原状回復とは、元の社会生活に戻すということであり、家族と共に暮らすということであれば、人間回復にはなりません。しかしながら、原状回復は最早不可能です。ですが、可能な限りの原状回復を願っておるところです。

今日、ハンセン病問題基本法が運動の核になっておりますが、基本法制定というのは、もともと統一交渉団の中で将来構想問題が起こり、そこでの論議で壁となったのが「らい予防法の廃止に関する法律」でした。廃止法に代って基本法を制定しなければ、将来構想問題は実現不可能です。2006年、厚労省との協議会の場で統一交渉団は将来構想問題を提起しましたが、厚労省は、将来構想など考える必要がないといたしました。それは国賠訴訟の控訴断念の折、小泉首相が最後の一人まで面倒を看ると約束したのだからそれでよいというものでした。そういいながら、厚労省は一方において、ハンセン病療養所施設長協議会に対し、将来構想を研究するよう委託し、その報告もすでに出されていたのです。

いわゆる長尾研究報告といわれるものです。そのことを問い詰めると、それは知らないと言い張り、さらに追及すると、あの人たちが勝手にやったことだと、とぼけました。なんとも卑劣としかいいようがありません。これが官僚の体質です。このことを十分に認識する必要があります。官僚というのは、自ら

の天下り先を確保しておきながら、弱者切捨てを行うのが常套手段です。後期高齢者医療制度が切り捨ての最たるものです。国は、国民の命と暮らしを守る義務を放棄しました。20年前、国立病院・療養所を統廃合しまして、地域から医療を受ける権利を奪ったのです。その後は、国立医療機関を独立行政法人に移行させました。日本の医療は未来に向かって進むのではなく、国民に負担増をさせながら、医療崩壊の危機にさらされるでしょう。

そういう時期にハンセン病問題基本法が制定され、将来構想案が実現したとしても、非常に危険なものを感じないわけにはゆきません。それは、私たち当事者が発言力をなくした時を考えるからです。私たちの発言力がなくなった時、国は何をするのか分からない、そういう危惧を強く抱いております。これまでのハンセン病の歴史を振り返ってみると、そう思わざるを得ないのです。

私の拘禁生活は67年に及びます。その間、官僚との対決の経験からして、官僚は信じられないとの思いを、この胸に深く刻まれております。

長い間、国と闘って知りえた事実です。将来構想案が実現したとしても、当事者の高齢化と共に発言力が喪失してしまうでしょう。その時、厚労省は何をするか分からない。そう理解すべきです。

最近、三つの壁があるといわれておりますが、私はその前に、官僚の壁があるということをお願いしたい。官僚の壁によって、それはまた、政治と一体となって、必ずや時代が過ぎれば、日本はアメリカの言いなりになり、若者たちは徴兵されるかもしれません。その時、ハンセン病療養所入所者たちは、また受難の時代を迎えるでしょう。

私は、皆様をお願いするしかありません。厚労省は絶対信頼できない。そこで、厚労省の運営を監視する役目が必要です。その役目は市民学会と弁護団だと思います。つまりは監視役の機関を設けることです。そういうことをこの場で切にお願いする次第です。

私たちに残された人生はあとわずかですが、市民の皆様と同じ空気を吸い、同じ語らいの場所で、民主主義とは何かを語り合える場所があってもいいのではないのでしょうか。そういう思いの将来構想問題を、そして基本法がなぜ必要なのか、真剣な討論を期待しております。多くの皆さん方の、格段のご協力をお願いしまして、私の挨拶とします。

2008, 3, 17 国本 衛

東京集会実行委員長の国本衛さんは、東京集会直前の3月21日、急逝されました。その後、ご自身のパソコンの中から上記の挨拶文が発見されました。おそらく国本さんがこの世に遺していった最後の文章です。東京集会にかける国本さんの願いを確かめ、遺志を受け継いでいきたいと切に願うものです。(ハンセン病市民学会東京集会実行委員会)